
囚われの王子と・・・番外編：愛する君の為に

帆摘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

囚われの王子と・・・番外編：愛する君の為に

【Nコード】

N4270H

【作者名】

帆摘

【あらすじ】

囚われの王子と・・・の番外編です。主人公はリディアーナの両親です。二人の出会いから結婚に至るまでのお話となります。R15程度の描写がありますのでお気をつけ下さい。

第1話

あれは、太陽が激しく照りつける夏の日だった。出会いは突然・・・だが必然。運命を覆しても手に入れない、自分の心を根底から揺るがす最愛の君、その日私は誓った。必ず君を手に入れる。どんな代償を支払っても貴方を手に入れてみせる・・・と。

「お前も今年からリザルの高等学校へ通うんだってな？」頼づえをつきながら、長年の幼馴染みでもあり、親友のレイモンドが話しかけて来た。

「ああ・・・てかお前もだろうが・・・」俺はぐったりと椅子に腰掛けたまま答える。

「しっかし今年は暑いよな。なんか異常気象だって言うぜ・・・俺んとこの国の作物も今年は出来が悪いみたいだし。」

「そうらしいな・・・」本当に暑過ぎて頭が回らない。侍女がずっと大きなファンを持ってこちらを扇いでくれているが生暖かい風がくるだけだった。

「でもさー、ちょっと楽しみじゃね？今リザルにはドーラ大陸からスミルナの王女が来訪してるらしいぜ。」レイモンドが二人で遊んでいたチェスの駒を一つ進めた。

「スミルナって、あの砂漠の？傾国の美女とかって呼ばれてるっつー女だろ？お前さ、範囲広すぎないか？いくら美女でもかなり年上だろ？それに大体お前、婚約者がいるだろうが・・・」

「美しいものを愛するのは良い趣味だと思うけどね・・・。ギル口

イは興味がないのかい？傾国の美女。俺も絵師が描いたものしか見た事ないけど、結構な美人だったぜ。でもかなり結婚適齢期を過ぎてるのにまだ縁談がまとまっていけないらしい。」大体ほとんどの王族や上流貴族の子女は20歳前には婚約者が決まっている事が多い。特に王女らは15歳で社交界入りすると同時に相手を見つけてるのが主流だ。だが、スミルナの王女は現在22歳という年になっても浮いた噂一つなかった。

「レイモンド・・・お前って本当にそういった情報には詳しいよな。傾国の美女ねえ・・・国が傾くほどの美貌ってことか。だけど、まあ俺は別に興味ないね・・・大体、大方そういった女って顔だけで、性格は最悪なんじゃねーの？結婚できねーのもその所為だろうよ。」

「お前って・・・はあ。もういいや、ギルロイ・・・お前人の事言えた義理じゃねーだろ。そんなんだからいつまでたっても縁談がまとまらないんだぜ。女は愛嬌があって可愛けりゃ十分じゃねーか。この間もお前んとこの親父、うちに来て嘆いてたぜ。選り好みが激し過ぎてなかなか縁談がまとまらないってな。」

「余計なお世話だよ。自分の相手ぐらい自分で見つけるさ。ただ今はあんまり真剣に思える奴がないだけで・・・」そういつて俺はじつとレイモンドの顔を見つめた。本当は・・・この人となら結婚しても良いと思える相手はいたのだ。だがそれは一足早く婚約が決まった親友の愛しい相手だった。そう、俺とレイモンド、そしてナディアは隣国同士で年も近く気のある幼馴染みだった。ナディアは王族では無かったが、隣国エストラダの上流貴族の子女で彼女の乳母が同じくレイモンドの乳母をしていた事もあり、よく隣国を訪れる度に一緒に遊んだものだった。

よく笑い、良く泣き、また笑う。お日様の様に朗らかなナディアに

俺は密かなあこがれを抱いていた。彼女に早くに亡くした母の面影を見ていたのかもしれない・・・。

「あのね、ギルロイ、すごく良い報告があるのよ！何だと思う？ふふ、私とレイモンド、婚約したの。この間、王宮から正式な使いが来たのよ。本当にびっくりしたわ。でも、私とても今幸せよ。あなたも喜んでくれるわよね？！」

「あ、ああ・・・おめでとう、ナディア・・・。そうか、君とレイモンドが・・・」頬を染めて嬉しそうに微笑む彼女を前に俺は気の利いた台詞ひとつ言えず帰ってきた。だが、君が幸せならそれで良い・・・。俺はうまく笑えているだろうか・・・？

「おい、ギルロイ！お前の番だぞ！」

「え、ああ、悪い・・・ちょっと考え事をしていた。」俺はあわててチエスの駒を進めた。

「チェックメイトだな！」レイモンドが勝ち誇った声で叫んだ。

「どうしたんだ、お前、今日はやけに弱いじゃないか・・・疲れてるのか？」

「いや・・・暑過ぎて頭が回らないだけだよ・・・。」

「そうか、そうだな・・・確かに今日は本当に暑い。」そう言ってレイモンドはテーブルの上に両手を投げ出した。

第2話

それから1ヶ月後、俺は学園都市、リザルに来ていた。入学手続きを済ませ、これから3年の間世話になる小さな2人部屋を見渡す。王族の場合、付き添いに一人の従者が認められる。その場合、主人と従者は暗黙の了解として同じ部屋になるのだが、俺はやっと手に入れた気ままな学園生活にわざわざ腰巾着を連れてくる必要も無いと考え、一人きりだ。

ということは、3年間の同居人となるパートナーがいるはずなのが・・・同居人はまだ到着していない様だった。さして広くもないこの空間ですつと共に過ごす事となる相手だ。気にならないといえは嘘になる。明後日には入学初日となるのだから、最低でも明日にはつくだろう。俺は隣の空っぽのベッドを見て考える。

「とりあえず、飯でも食いに行くか・・・」俺はそう呟くと、生徒用の寄宿舎を後にした。学園都市というだけあって、リザルには安くて美味しい食堂が沢山ある。このリムド大陸のみならず、その他2大陸、ウリムナやドーラからも沢山の王族、貴族階級の子が集まる。

この学園都市では、王族であろうが、一貴族の子女であろうが、扱いは一緒だ。小さな2人部屋を与えられ、其処で3年間過ごす事となる。

まあ、王族に関しては一人の従者を伴う事が許されているので、ほとんどは従者との相部屋となるが、せつかくの学院生活だ。どうせなら違う相手と知り合うのも悪くはない。

食に関しても、3大陸の様々な郷土料理などが食べられる様手配しており、毎日違った国の料理を食べる事もできる。昨日はモルジュアナの郷土料理を食べてみたが、小麦粉を練って薄く焼いた生地

上にふんだんに野菜や肉、そして独特のソースがかけられており、なかなか美味かった。これからの食生活には期待できそうだった。しばらくぶらぶらと歩いていると前方に見知った顔がある。向こうもすぐにこちらに気がついた。

「ギルロイ！」隣国の王子、レイモンドが満面の笑みを浮かべて手を振っている。俺も軽く手を挙げると、やつがいる方へと歩いていた。

「お前んとこの部屋の相棒とはもう会ったのか？」

「いや、まだだ。多分明日にはくるだろう。お前の方は？」

「そうか・・・俺はこいつが一緒について来たからな・・・」そういつてレイモンドは自分の隣を指差す。そこには俺たちと同じ年ぐらいの線の細い少年が立っていた。

「誰だ・・・？」

「あれ、お前会った事なかったけ、俺の従者のカルキンだ。こいつ、こんな細いなりしてっけど、優秀な騎士の家系の出なんだぜ。剣の腕もなかなかだしな。」俺がそいつの方に目を向けるとカルキンは黙って黙礼する。

「へえ・・・そうなんだ。知らなかったな・・・てかお前いつも従者なんて連れてたか？」

「いや、従者つても、ほとんど護衛に近いからな・・・。」

「そうか・・・。」最近エストラーダの国内では不穏な動きがあると聞く。その事もあつての護衛なのだろう。

「まあ、宜しくな。」そういつて俺はカルキンに手を差し出す。一瞬吃驚した様な顔をしたが、おずおずと俺の出した手を握り返して来た。なるほど、結構握力もある。

「で、お前、まだ飯くつてないんだつたら、これ試してみないか？」そういつてレイモンドは頭上にある看板を指差す。「そこには見慣れない文字が書かれている。リザルの学園都市では3大陸共通の言

語であるサングリッドを使う。だが、看板に書かれているのは見慣れない文字だった。

「・・・どこの国の料理なんだ？」

「へへ、ここ、新しくできたスミルナの郷土料理の店らしいぜ。ドラ大陸は他の二大陸と距離が随分離れてる上、砂漠の中にある国ばっかだろ。食文化も俺らのはまったく違って面白いもんが食えるって聞いたからさ。」

「ふうん・・そうなのか。」まあ、とりあえずは食えれば何でも良い。寄宿舎で出される朝餉は寝坊したので食っていない。俺はきゆるきゆるとなる腹をかかえつつ、レイモンド達と一緒にその食堂の中に入った。

「いらつしゃい！」中から威勢の良い声が聞こえる。「学生さん達かい？その制服を見るところ新入生だね、学園都市、リザルへようこそ！とりあえずその辺の空いてる席に座ってくんな！」

店内を見回すと丁度店の奥に4人分のテーブルが空いている。俺たちはさっそく奥へいくとテーブルについた。

「どんなものがあるんだ・・・？」テーブルの真ん中に置いてあるメニューを広げる。色々と説明は書いてあるが、まったくもってどういう料理なのかわからない。3人でメニューを広げたまま考え込んでいると、ふいに隣から声が聞こえた。

第3話

「どれが良いかわからなかったらおすすめのプラターを頼むといいよ。それだったら、何種類かの料理を一度に試す事ができる。」

俺たちは声の主に振り返る。俺たちの隣に座っていたのは一瞬目を見張る様な美青年だった。民族衣装だろうか、ターバンらしき布で頭を隠し、金と赤で刺繍された衣服を着ている。所々に房がついており、美しい宝石の玉がぶら下げてあった。彫刻の様な彫りの深い顔に紫色の瞳が二つの宝石のように煌めいている。珍しいな・・・王族だろうか・・・。

「あ、ありがとう。もしかして君って・・・スミルナの・・・？」俺の前に座っていたレイモンドが声を上げる。

「ああ、申し遅れました。私は今年からこの学院に通う事になったセルムと申します。確かに私はスミルナ出身です。皆さんも新入生なんですよね？これから3年間よろしくお願い致します。」そういつて彼は挨拶の手を差し出した。

「こちらこそ」そうつて俺は彼の手を握り返す。

「そういや・・・その格好を見ると、まだ寮には行ってないんだな。部屋はもう決まっているのか？」

「はい。今日の午後行く予定なんです。部屋は3階の1番右端、たしか312だったと記憶しています。」

「え」彼の言葉に驚いた。ということは、こいつが俺のこれから3年間のルームメイトと言う訳か・・・。

「それじゃ、俺がルームメイトのギルロイだ。ギルと呼んでくれ。」

「貴方が・・・？それは・・・こちらこそよろしく願います。」

「見たところ、従者は連れて来てないんだな・・・良ければ俺たちと一緒に食べないか？」

「宜しいのですか？では、宜しく願います。」そういつてセルムはにっこりと笑った。

彼がテーブルにつくと同時にレイモンドが待ちきれないと言った様子で質問する。「ねえ、君って本当はスミルナの王族なんじゃないの・・・？その・・・、違ってたら悪いけど、もしかして君のお姉さんってロザリア王女・・・？」

彼はじつとその紫の瞳で彼を見つめていたが、ふと笑うと言った。

「姉をご存知なんですね・・・？そういう貴方はエストラダの第一王子、そして貴方はアステールの・・・違いますか？」

「えっ、よくわかったね・・・。俺たち皆制服着てるのに」学院内では提供される制服を着る決まりがある。彼も今は民族衣装を纏っているが、明日になれば、制服に着替えるのだろう。

「そりゃあ知ってますよ。ウリムナ大陸で名高い国の事は・・・。お二人は幼馴染みか何かですか？」

「ああ・・・」

「そうですか・・・それは素晴らしいですね」

レイモンドはもつと彼にロザリア王女の事を色々と聞きたがっているそぶりを見せたが俺に睨まれて首をすくめる。長年の付き合いだ、やつの思考回路は大体熟知している。横で従者のカルキンが含み笑いをしていた。

しばらく話しているうちに料理が運ばれて来た。肉を串に刺したものや、パンで包んで食べるもの、他にも何種類かの料理があり、なかなかうまそうだった。

「これは、こうやって食べるんです。」彼は平たいパンをとると、その口を開く。そしてその中に煮豆や野菜などを入れてちぎって食べた。

「なるほど」そういつて真似を試みる。なかなか美味かった。

食事の後、別にこれといって用のなかつた俺は今日からルームメイ
トとなるセルムの手伝いをすべく荷物が置いてあるというホテルへ
と向かった。レイモンドもついて来たそうにしていたが、カルキン
に引つ張られて、寮へと戻った。なんでもまだ部屋の中はぐちゃぐ
ちらしい。

ホテルにつくと部屋の前で屈強そうな兵士が二人立っている。この
学園都市は中立国として、どの国からの生徒も分け隔てなく受け入
れている。もちろんこの学院内での殺生やもめ事は御法度だ。もし
生徒の中に戦争中の国の敵がいたとしても、この学園都市内では一
切もめ事を起こしてはならない。そういった決まりの上で成り立っ
ているのだ。

通常ならば、兵士などもこのリザルに連れ入ってくる事はできない
はずなのだが……。俺の不思議そうな顔を察知してセルムが口を
開いた。

「姉上と一緒に来てるのですよ……。このリザルにね……」

第4話

「お帰りなさいませ、王子・・・そちらの方は・・・？」
部屋の前で従者らしき男が近寄ってきてうさんくさげにこちらを見ながら聞いて来た。

「これから3年間、私と同室になるアステール王国のギルロイ王子だ、失礼のない様に・・・」
セルムはその男を静かに諭した。慌てて男が頭を下げる。

「申し訳ございません、私めはこのリザル滞在中セルム王子とロザリア王女の世話をしているオルキと申します。以後お見知り起きを・・・」

「いや、気にしないでくれ。ここにいる間は王子だろうが王女だろうが、一人の学生と変わりはない。」

セルムはこちらを紫の瞳でじっと見つめると笑って言った。「・・・あなたとは本当に気があいそうですね、ギル・・・あなたが私のルームメイトで本当に良かったと思っています。スミルナの神に感謝しなければ・・・それにしても、こんな所で立ち話は何ですから、どうぞ、部屋に入って下さい。」

俺はセルムの後について部屋に入った。なかなか快適そうな広い部屋だった。応接間と幾つかの部屋がくっついていてる。

「へえ・・・リザルにこんな洒落た所があるとは知らなかったな。」

「最近では、高級感を出した民宿をホテルと呼んで一般と隔離しているそうですね。私もこちらに来るまではまったく知りませんでした・・・」

「ホテルねえ・・・俺は部屋をぐるりと見渡す。さすがに王宮と同じ・・・とは行かないものの、確かに素晴らしい調度品があつらえ

てであった。先ほどの従者が2客の繊細な模様の施されたカップにお茶をついででていく。一口飲んで見ると、ほんのりと甘い香りが出の中に広がった。

「これは、スミルナの特産の一つである、ウヴァという茶です。おいしいでしょう?」

「ああ、なかなかいける・・・」

その時、奥へと続く部屋の一つがギィと音を立てて開いた。聞こえて来たのは鈴を転がす様な声だった。

「セルム・・・帰って来たのですか・・・?」

「姉上・・・」

俺は一瞬何かに取り憑かれたかのように扉にしなだれかかる彼女を凝視した。目を見張る・・・そういった言葉が正しいのか・・・部屋着なのか、身体のラインがわかる薄めの布を巻き付けた肢体にそえられる。身体を覆うように見事な黒緑の髪が足下まで流れている。それよりも何よりも一瞬俺を見据えたその瞳・・・セルムのそれよりも濃い紫の一对、陶磁器の様な肌と整った鼻、そして小さく開かれた桜色の唇、言葉を失ってしばしの間その人に見とれていた。

「・・・だれ?」はつとしたように彼女は扉を閉めた。

「すみません、姉上は人見知りなのです。許してやって下さい。」俺はなおも閉められた扉のその向こうに意識を傾けていた。あれがレイモンドの話していたロザリア女王?たしか22歳だと・・・いやでもあれが?どう見ても少女のようだった。ちらとかいま見たその肢体は確かに成熟していたが・・・カッと身体が熱くなるのが自分でもわかった。

俺の様子を見ていたセルムが訝しげに声をかけた。

「ギル・・・?どうしたのですか?」

俺は一生懸命自分を抑えながらゆっくりと答える。「すまん、何で

も無い……」

しばらく何も言わずに俺の方をじっと見ていたセルムだったが少し小さく笑って言った。

「姉上は美しいでしょう……？あの方は私の唯一の同腹の姉なのです。我がスミルナの宝と呼ばれていますが……」そう言ってセルムは一口お茶をすする。そして意味ありげに言葉を続けた。「どなたがあの人を買い取る事になるのでしょうか……。」

「買い取る？」穏やかではない物言いに驚いて聞き返す。仮にも一国の王女を買い取るとはどういった見なのか……。

「……そのままの意味ですよ。スミルナの王、つまり私の父上には100人にも及ぶ妾がいます。私たち兄妹はそんな大勢の妾の中の一人、王に最も寵愛を受けた姫から生まれたのです。スミルナは代々、国の有力な貴族や諸国に、自分の娘や息子を差し出して大きくなつた国です。」

姉上は、世間一般ではもちろん婚期をとくにこしていますが、それでも、姉を欲しがらる男が後を絶たなくて、国では死闘を繰り広げる始末……。

父上は密かに幾つかの大国に書状を出して、一番高く彼女を買ってくれる相手に姉を差し出す魂胆なのですよ……。」

第5話

「・・・そんな顔しないで下さい、ギル・・・。確かに人道的な処置ではありませんが、姉はその事は承知ですよ。仕方がないんです。姉は、国の宝と同時に国に争いを引き起こす種とも言える存在ですから・・・。父上としては、一刻も早く姉上の相手を決めて嫁がせたいと思っているでしょう。」

「そうなのか・・・大変だな。しかし、何故彼女はお前と一緒に此処へ来てるんだ？学校に通う訳でもあるまい？」

「理由はいくつかあるんですけどね・・・まあ、一番最大の理由は近じかこのリザル近くの商業都市モロツコスで内密に近隣諸国の王族や貴族、豪商達を集めた競りが行われます。姉は・・・その競りにかけられるんですよ。」

「・・・嘘だろ？いくら何でもそれはっ？」
セルムはじつとギルロイの黒い瞳を見つめて言った。「本当の事です。競りで一番高い値段を付けたものが姉を手に入れる。それが一国の王だろうが、貴族だろうが、商人でも。でも王族なんて皆同じ様なものでしょう？自分が望んだ相手と結ばれる様な者は本当に一握りしかいませんよ？私もいずれは国の為に意に添わない相手と結婚することになるでしょう。」
貴方は・・・どうなんです？ギル・・・？」

「俺は・・・」確かにセルムの言う通りだ。この世界において王族や貴族達が自分の望んだ相手と結ばれる事はほとんど無いに等しい。実際、自分の母親でさえ、顔も見た事のない男の元へ嫁いで来たのだ。大量の持参金を持って。幸い、自分の母は父を愛し、王妃の座

にありながら、他の側室らとも上手くやっているが、ほとんどの王室の裏の顔はドロドロしたものだと聞く。

確かに非人道的だといくら叫んだところで現実が覆される訳ではない。

自分もつい先頃それを身にしみて感じたばかりではなかったのか・
・。

「確かに・・・お前の言う通りだな。俺がどうこう言える立場ではない。俺もいつかは、妃を娶らなければならない。実際今でも婚約だの何だのとうるさい所だがな・・・」そういつて俺は薄く笑った。

「そうですね・・・私も姉が出来るだけ良い人と巡り合うことを祈るのみですよ。そう、貴方のような人になら安心して姉を任せることができますんですけどね・・・？」

俺はぎょっとしてセルムの彫像のように整った顔を仰いだ。

「冗談・・・ですよ。さて、少しゆっくりしすぎましたね。従者に荷物を持って行かせるので、寮まで案内していただけますか？」

そう、その為にここへ来たのだ。だが、最後に呟いたセルムの一言が俺の心の中で渦巻いていた。俺が・・・あの女を娶る・・・？ばかばかしい、確かにレイモンドが話していた通り、一瞬かいま見た口ザリア王女は息を飲むほど美しかった。だが・・・それだけだ！俺は雑念を振り払うように立つとセルムと従者を手伝って学院の寮へと戻った。

「此処が俺たちが3年間一緒に住まう部屋だ・・・しかしセルム、従者は一緒でなくて良いのか？大概の王族は従者を連れて来ている奴が多いが。」

ちらりと荷物を運び入れる従者の方を見ると笑いながらセルムが言う。「貴方も一人で来られてるではありませんか……。私は一人の方が気楽ですし、それに……。いえ、こうして貴方と同じ部屋になったのですからこれからは楽しみですよ。」

「俺も、楽しみだ。これから宜しくな、セルム。」

「こちらこそ……。ギル。」そういつてセルムは静かに目を伏せた。その時俺はセルムが言葉に含んでいた意味に気付く事は無かった。短く礼をすると、従者は一人ホテルへと戻っていった。

第6話

セルムの荷物の片付けをしながら、俺はふと不思議に思っていた事を聞く。

「そのターバン・・・部屋の中でもとらないのか？」

「え？ああ、そうでしたね。大抵人前にするときにはこれを付けているのが決まりなので・・・ですが別に今は必要ありませんね。」
「そういつてセルムは器用にターバンを解いて行く。ターバンを取り去ると三つ編みを巻いた長い髪がでてきた。ギルロイの視線を受けてセルムが解釈する。」

「うちの王家のしきたりなんですよ。王族は成人するまで髪を切らない事・・・髪には精霊が宿ると言われていますしね。」

俺はセルムの黒緑の髪に目をやる。「確かに・・・精霊でも宿りそんな髪色だな。もちろんそんなものが本当にいればの話だが・・・」
ふふんと鼻で笑う。

「おや、ギル、信じていないのですか？4大元素を司る精霊がいるからこそその魔術ではありませんか・・・。そんな事を仰ったらきつと教授に嘆かれますよ。それに・・・私の母は、元々ゲール大陸の砂漠を放浪するジプシーと呼ばれる流れ民族の出で、その民族ではこの黒緑の髪を持って生まれた子供はとても大切にされるのですよ。この髪色は強い魔力を持つ証と同時に精霊に愛された子の証としてね・・・。」

現に私の姉上も生まれた時から飛び抜けて高い能力を持っているのですよ・・・まあ口さがない連中は魔女だなんて囁いてますがね・・・

「

「国の宝に、傾国の美女、それに魔女か・・・えらい勲章を付けら

れたもんだな、お前の姉貴も・・・」

「そう・・・ですね。姉上も私も平穩とはほど遠い運命を義務づけられているのでしよう・・・」

「何を言っている・・・、運命など自分の手で掴み切り開いていくもんだろ？本気で何かを得ようとするとするなら諦めるなよ！」

「本当にそうなのでしょうか・・・？ギル貴方は・・・？」一瞬心の奥底を覗かれた様な気分陥った。セルムの瞳が俺の心を突き刺した。そうだ、俺も偉そうに人の事は言えないナディアの事については結局俺は足掻きもしなければ、何もしなかったではないか・・・友情を壊したくないと自分に理由をつけて。だが所詮はそれだけの想いだっただの・・・憧れ、幻想・・・自分がどんな手を使っても手に入れないなどと思う女など現れるのだろうか・・・？

急に黙り込んだギルロイの様子を見ながらセルムはこのリザルにくる前の事を思い返していた。姉上と一緒に母方の祖母で占い師でもあるおばばの家を訪れた。暫く・・・いや姉に至ってはもしかしたらもう2度とあう事は無いかもしれない・・・そんな思いを抱えつつ、訪れた祖母の家で私たちは思わぬ予言を聞く事となった。

「ふむ・・・セルム、そしてロザリアよ。お前達に変化の兆しが見えておる・・・お前達は大きな・・・大きな運命の星と出会う事になるだろう、そしてその星はお前達二人の運命を導く。この星は波乱と変革、その星の影響でセルム、お前には新たな道が開かれる、そしてロザリアよ・・・お前にとって、この星は・・・ふふ面白いものになるかもしれぬのう・・・」

「どういう事ですか？ばば様・・・一つの運命の星が私たち姉弟二人の運命を左右するということですか？」

「そうじゃ、ちかじかお前達はこの星と出会う事になるじやろ。セルム、ロザリア・・変革を恐れるな。この星はお前達にとって波乱と迷いを生むものではあるが、それをどう受け止めるかはお前達次第じゃ。道を誤るな？わしは、お前達二人の幸せを願っておるからのお。」姉は、じつとば様の言葉を静かに聞いていたが、その言葉に小さく頷いた。

「何処かの金持ちの貴族や豪商に買い取られるか・・王族だとしても、妾の一人としてお父様がなさってきたように後宮で楽しくもない人生を送るのに比べれば、私は波乱でも人らしく生きる道を選ぶわ・・。もう男に振り回される人生なんて沢山よ・・。」帰りますから姉上は震えながら吐き出すように呟いた。

そして二人はこのリザルへとやって来た。ばば様は私たち二人を巻き込む運命の星についてこうも言った。お前のすぐ近くに・・。その星は現れるだろうと・・。

第7話

セルムはじつとギルロイの顔を見つめていた。ばば様ははつきりとは言わなかったが・・・彼がそうなのだと・・・星なのではないかとセルムの直感が告げていた。稀代の占い師である祖母の血を引き継ぐセルムの直感でこういった類いのものは外れた事が無かった。

「・・・なんだ？俺の顔に何かついてるのか？」

「いや、何でもないよ、ギル。本当に・・・これだから楽しみだね・・・

。」そう言つてセルムは極上の笑みを見せるのだった。

その頃、ホテルではロザリアが侍女に湯浴みを手伝ってもらっていた。侍女の名前はシャロンといい、ロザリアが唯一、スミルナから連れて来た侍女だった。幼い頃からの幼馴染みでもあり、ロザリアと同じ年の彼女は4年前に結婚して一度侍女を辞めたものの、今回、ロザリアが国をでるにあたり、もう一度侍女として志願し、付いて来たのだった。彼女の夫は同じく姫付きの料理人として、2歳になる娘と共に一緒に来ていた。

「セルムはもう、行つてしまつたのね・・・。」

「明日から学院が始まりますから・・・。」

「ええ、そうだったわね・・・。」

「姫様・・・、セルム様は、またちよくちよく顔をお出しになられますよ。たつた一人の姉君名のですから・・・。」シャロンはロザリアの床まで届く長く美しい緑黒髪を梳きながら言った。

「そうね、本当にせわしない事・・・今日帰つて来たと思えば、誰か知らない男が部屋にいて吃驚したわ・・・あれは一体誰だったのかしら？」

「御学友では無いのですか？」

「そうなのかしら・・・」ロザリアは今日、一瞬かいま見た若い男の

姿を思い出す。黒髪に黒い瞳をもつ、そう、まるで黒い豹の様な男。あちら側も吃驚したように私を見ていた。だが、ああいった視線はこの世に生まれ落ちたその瞬間から今までずっと受け続けていたものだ。羨望、妬み、嫉妬、賞賛から人の身体を舐めるように見る輩まで、男であれ、女であれ、大抵自分を見たものは似た様な反応をする。

私は数人のものを除いて男が嫌いだった。大体父上からして、妾を100人も持ち、それぞれの妾が王の寵を競って争うのを面白そうに眺めていた。幸い自分達の母はその美貌故王にもっとも愛された寵姫となったが、それだって、あと数年も立てばその地位は揺らいでしまうのだろう。あの男にとって女などそれだけの、そう上辺だけの価値しかないのだから……。

生まれ落ちた瞬間から、ばば様は私にとってありがたくもない宣託を告げた。

「この娘は大きくなるに従いより美しく、その美貌は遙か彼方の大陸の果てまで知れ渡るだろう……。しかし、この娘を巡って国内は争いが絶えず、国を揺り動かす傾国の美女となりえん。」

父上は、祖母である、流れの占い師の言葉など信じてはいなかった。だが、私が大きくなるにつれ、私を得んとする、貴族間で最初のいざこざが始まり、それは収まるどころか私を他所に大きくなっていく一方だった。それは近隣の諸国をも巻き込み、国では勝手に決闘を起こした者達が死んで行く始末。だが、それを見た所でどう思えというのだろうか。・悲しむべきことなのだろうが、それらは私の意思をまったく無視したものだ。あつた事もない知らない男の家族に人殺しと罵られ、男を喰らう魔女だと囁かれる。そんな生活はもう真つ平だった。

幾度か、婚約が決まりかけたかと思えば、覆され、私の事をよくも知らない男がひざまずいて愛を乞う。もうたくさんだった。

そして、ある日、父上が言った。お前をこれ以上国に置いておく事はできない。確かにお前は占いの予言通りの傾国の娘と成り果てた。この上は、お前を欲しがる諸国の者達にお前を売り渡そう。酷い父親だと思ってくれて良い、儂にはこの国を守る義務がある・・・と。私は父の選択などどうでもよかった。どうせこれ以上ここにいても私の意思を無視して全てがなされて来たのだ、今更売られたところで、代わり映えはしまし。そうして私は弟のセルムと共にこのリザルへとやってきた。数週間後には何処かの金持ちの物好きにこの身を明け渡す事になるのだろう。だがその刹那、最後に会ったばば様の言葉が閃いた。

「運命の星・・・か」

「え？何かおつしやいましたか？姫様」髪の毛を湯で洗い流し、高価な香油を髪に塗り込んでいるシャロンが目を上げた。

「いいえ、なんでも無いわ・・・ありがとう、シャロン。こんな私の為にここまで付いて来てくれて・・・貴方には本当に感謝しても足りないわね。」

「とんでもないですわ、姫様・・・姫様があんな形で国をでる事になって、私、いても立ってもいられませんでした。少しでも姫様のお役に立てるなら、私は幸せです。」

第8話

「ありがとう・・・シャロン。あなたの存在に私がどれだけ救われているか・・・貴方の夫や娘にまで慣れない土地で苦勞させてしまつて本当に申し訳ないわ・・・。」

「もうそれ以上言つたら怒りますよ、姫様。私たちは納得して付いて来ているのですから・・・これから姫様がどのような方の元へ嫁がれようと、私たちはずっと一緒ですよ。」

「ー本当に、お可哀想な姫様・・・。生まれた時から蝶よ、花よと育てられた反面、姫様の周りに集まつてくるのは全て姫様の外見ばかりを気にする男ばかり・・・姫様が男嫌いになられたのも無理はない私の母がずっと姫様と、弟君の乳母をしていた関係で私は、姫様と一緒に育つた乳姉妹だった。数多くいる他の姫君とは違い、下々の私たちの事まで気にかけてくれる姫様、誰よりも美しいのにそれを鼻にかけず、いつも慎ましく生きて来られた姫様がこんな仕打ちを受けるなどと・・・本当に誰が考えただろうか。」

表向きはいくら、数多くの求婚者達の中から姫様の相手を選ぶといつていても、実際は、より多くの金を差し出したものが姫様を得るのだ、それがどんな年寄りだろうが、不細工な輩だろうが・・・。姫様は何も言わずにそれを受け入れられたが、内心どんなにかお辛い事だろう・・・。願わくば・・・姫様を娶られる方が姫様の内面を見て大切にしてくれるお方だったら・・・。

「あまり長く浸かっているとさすがに湯あたりするわね。そろそろ出るわ。」そういつてロザリアは立ち上がった。蒸気で少し赤く染まった肌が何とも言えず艶かしい。まるで神の作つた最高傑作の彫像のようだ。シャロンは同性だが、それでも毎回その美しい肢体に

は見惚れてしまう。

着替えを済ますと、ロザリアはサロンの長椅子に横たわった。涼しい風が吹いてくる。瞬く星と月を眺めながらそこでもう一度考えを巡らす・私の運命の星とやらの事を・・・

――――
始業式が行われ、ほとんどの生徒達は既に講堂に集まっていた。初日はこれから、各自自分の取った科目により、移動教室になるので、クラスルームを確認する為に、多くの生徒が行き来している。学院では、学年により、制服の色が違ってくる。初年度は、赤、2年目は緑、そして最上級は青だ。

ギルロイはあくびをしながら校内をたらたらと歩いていると目線の先に見知った顔を見つけた。

(あれは・・・昨日ホテルであったセルム達の従者・・・?)

その男は最上級の制服を纏う男と何やら話しをしている。何やら学院に似つかわしくない雰囲気だが、少し立ち止まってその二人を見ていたら、セルムの従者がこちらに気がついた。

慌てて立ち去って行く。上級生の方はつかつかとやって来ると俺を睨みつけた。

ふとその顔を見て見覚えがある様な気がする。何処かであったか・・・?

「お前、今年入って来た新入生だな。こんな所で何をしている?」
そいつが偉そうに言う。

「別に、校内をふらふらしていただけだ。」
「そういつてギルロイは相手を睨みつけた。」

びくっと相手がその視線にたじろぐ。「ふ、ふん、ともかくここはお前のような奴が入って良い区画じゃない!ここは最上級生の、し

かも選ばれたものしか入れない一画だ。さつさと立ち去れ！」
そんなものがあるとは聞いた事も無いが・・・と思いつつもギルロイは軽く首をすくめると言われた通りに歩き出した。別にこいつに興味がある訳でもない。ただ少し気になるのはセルムの従者が何故こんな所での男と話をしてたかという事だが・・・。まあ、後で寮に戻ったらセルムに聞いて見るか。

実は校内をうろろろしている間に、校舎とはかけ離れた場所に来ていたのは事実なのだが、帰り道がさっぱり分からない。また適当にうろろろしていると、今度はレイモンド達に出会った。

「あれ・・・ギルロイこんな所で何やってんの？」レイモンドが目を丸くして問う。

「迷ったんだ。お前達こそこんな所で何をやっている？」

「私たちは、明日からここで、トーバスの練習があるのですよ。」と横から、従者のカルキンが口を添えた。

「ああ、そうか、なるほど・・・」トーバスとは大陸の昔からある球技の一つで各チーム5名ずつが各チームの持つ魔道石の入ったボールを指定時間内に追いかけて、相手チームのボールをコートに入れるのだが、魔道石の入ったボールはそれ自体、意思があるかのように動き回り捕まえづらい。しかもそれを、棒のついたネットで虫を取るかのよう走り回って追いかけるのだ。

「僕たちもこれから戻る所だったんだ、一緒にいこう。」そう言つて3人は歩き出した。

第9話

ギルロイが無事に元の建物へと戻って来た頃には全ての学科のオリエンテーションは終わっていた。まあ、仕方が無いか……。ギルロイは首をすくめるとそのまま、寮へ向かって歩き出した。レイモンド達もこの後の予定が無いのか一緒にについてくる。その時、やおらひと際強い風が吹き抜けてギルロイが首に下げていた学生認証書が飛ばされた。

「ちっ」と軽く舌打ちすると、ギルロイは振り向いてレイモンドに行った。「わりい、あれ取ってくるから先に帰って！」「そう言い残し、鞆を置いたまま飛ばされた認証書を追いかけるように走って行った。

「あゝあ……。鞆まで置いて行っちゃって……。これって僕に部屋まで届けるって事？」

「私が届けておきますよ、殿下。それよりも……。気がつかれましたか？」

「え？何が？」

「ああ、そうでした。殿下はあまり魔力をお持ちになっていらっしやらないのでしたね。」

「それって嫌み？」じろつとレイモンドが従者を睨む。

「いいえ、そう言う訳ではありませんが、先ほどの風、あれは魔術で起こされたものですよ。風の精霊が、ギルロイ様の認証を取って去って行くのが見えました。」

「え？そうだったの？てつきりただ単に強い風が吹いたのだと思っ
た！」

「殿下……。殿下はまったく魔力が無い訳ではないのですから、御勉強次第ではちゃんと基礎程度の魔術を使う事も可能なのですよ？」

「え〜でもさあ、うちの国って魔術師より、生粋の騎士や戦士を生み出す確立が高いじゃん。別に魔力が無くたって苦労はしないよ。魔術なら王家直属の魔術師に任せておけばいいんだしさあ。基礎程度の魔術があつたって・・・」

「将来国を預かる方が何を甘い事を仰っているんです！剣だけで何もかもが片付くなんてまさか思ってる訳じゃないですよね?!」

「ああ、頼むから説教は勘弁してよ。ともかくさ、ギルロイの奴の鞆届けてきてよ。その後で話はゆっくり聞くからさ。」

「本当でしようね・・・?」

「マジ！本当だつて！そんな睨むなよ。ちえつ、とんだ迷惑だよ、ギルの奴、今度絶対おごらせてやる！」従者に説教されそうになつたレイモンドは、去つて行つたギルロイの後を見ながら小さくため息をついた。

風はどんどんギルロイの認証を飛ばして校内から外に出て行く。

「くそ、なんなんだ、この風は！」ギルロイは悪態をつきながらそれでも認証書を追つて走つて行つた。認証書はもちろんリザルの学院での学生であるという証と共に、校内の各所を出入りするときのキーにもなっている。また、各自の寮の部屋のキーにもなっているのだ。

無くしても新しいものを発行してもらえるが、お小言は免れない。どういふ訳か、風は一向に止む気配がなく、ギルロイの認証を乗せたまま郊外へと移動していく。リザルは校内こそ広いが、一歩町に出ると、数本の路地にある、学院御用達の店が建ち並ぶ大通りを残して、少し寂れた地区へと入って行く。

あまり普通の学生が立ち居らない地区まで来ると、風は勢いを無くしすつとんとギルロイの認証書を落とす。まったく・・・といいなから、認証書を拾いあげ、戻ろうとすると、奥の物陰から人の声が聞こえる。

「んっ、はあ、はあ・・・ああん！」女の嬌声だった。ふと考えを巡らして回りを見渡す。そういえば学院の寮に入って1日目に仲良くなつた寮生が、リザルの繁華街の裏でこっそりと運営する売春宿があると云っていたな・・・。表向き各地の王族や貴族の子女が集まるこの学院都市でそういった売春宿などは認められていない。だが、若い者達が集う学院の裏には色々となつていった裏情報も溢れているのだ。

少し興味を惹かれたが人様のプレイを覗き見る趣味はない。踵を返し歩き始めようとした所でいきなり腕を引っ張られて路地に引きずり込まれた。咄嗟の事でバランスを失い地面に倒れ込む。

一体なんなのだと思つて顔を上げると其処には南方の民族が着る様な頭からすっぽりと布をかぶり目だけを出した女？が俺の上に乗つてかっていた。

そいつは俺の首にナイフを突きつけると低い声で言った。「動かないで！貴方は一体誰？何故こんなところにいるの？」

うんざりしながらギルロイは自分の上に乗つかる女を見つめる。それはこつちの台詞だった。いくら顔を隠していても昨日垣間見た美しい紫の宝石の様な双眸を忘れるはずはない。

だが解せないのは、何故、彼女が今自分の上に乗つて俺にナイフを突きつけているのか、しかもこんな寂れた路地裏で女の嬌声を聞きながら・・・。

俺は身体に少し力を入れるとガツと彼女の細い手首を掴み反対に彼女を地面に押しつけフードをはぎ取った。やはり・・・現れたその顔は昨日ホテルで一瞬だけ顔を逢わせたロザリア王女のものだった。

彼女は悔しそうに唇をわなめかして俺を睨みつけた。美しい・・・間近でみると本当に神が作り上げた最高傑作と呼ばれる意味がよくわかる。しみ一つない美しく白いアラバスターの肌、睨みつけていても尚輝きを損ねない二つの宝石、そして化粧を施していないのに赤く誘う唇。

「卑怯者！」彼女が短く叫んだ。

「人にナイフを突きつけておいて言う台詞か？俺こそ聞きたい・・・セルムの敬愛する姉上がこんな路地端で何をやっているんだ・・・？」

第10話

「お前は・・・カルファの手のものでは無いのか？」戸惑ったように彼女が問う。

「カルファ？誰だそれ？」このお姫様は一体何を勘違いしているのか・・・。2、3本先の路地でひと際大きな喘ぎ声上がり、それを耳にしたロザリアは耳まで赤くしてギルロイに言った。

「・・・私の間違いだったかもしれない、ともかくどいて下さい！耳まで赤く染めた彼女をからかうように、俺はかgando彼女の耳元に口を寄せて口づけながら言った。「逃げないと誓うなら離しても良いが・・・？」

耳に軽く口づけされたロザリアは真つ赤になつてギルロイを蹴り上げた。

「いつてえ・・・」しぶしぶ手を離れたギルロイから彼女は数歩後ろに後ずさると怒つて言った。

「何するんです！やっぱりあなた、カルファが取引を行ったという男なのですか?!」

「嫌・・・だから俺はカルファなんて男は知らないし、ここに来たのはたまたま風に飛ばされた学生証を追いかけて来たまでの事だ。」そういつて俺は首に下げた学生証をふらふらさせて彼女に見せる。

まだ納得していなさそうだったが、俺が学生証を差し出すとそれをおずおずと手に取つてみた。

学生証を見たロザリアは呟いた。「あなた・・・まさかアステールの・・・？」

「へえ？おれの事知つてんの？男嫌いのお姫様が知っている他の大陸まで聞こえる俺の噂はどんなものなのか是非教えてもらいたいね？」

アステールは父上が私の嫁ぎ先として白羽の矢を立てた大国の一つ

だった。アステールがもつ様々な技術や知識を取り込みたいというのが真の目的だったようだ。アステールの王子は長男の第一王位継承者のギルロイ王子が確かまだ15〜16歳という事で年が離れすぎているため断られたと父上が言っていた。私も7つも年下の子供に嫁ぐつもりは毛頭なかったし、見合い用の絵姿さえも見てはいなかった。そうか、この男がアステールのギルロイ王子・年下とは思えないぐらいの精悍な体つきをしている。低く落ち着いた声が耳に心地よかった。弟と同じぐらい・・・？そしてはたと気がついた。そうだ、この黒い瞳の男は・・・

「別に・・・噂なんてされてはいないわ。間違えてナイフを突きつけてしまった事は謝ります。そういえば、あなた、先日セルムと一緒に居た・・・？」

「ああ、セルムと同室のギルロイだ。覚えているだろう？」一瞬だけだったがと心の中で付け足す。

「セルムと同室・・・あなたが？そう・・・じゃあ本当に関係のない人だったのね、ごめんなさい。」彼女は真摯に謝る。

「それより、何故こんな路地裏に居たのか話を聞かせてもらえないか？」

ロザリアは少し考えるように黙ったがやがて口を開いた。

「あなたが来たときに、うちの従者と逢わなかったかしら？彼がカリファよ。彼はお父様の言いつけで私が何処かに嫁ぐまでの世話を任されて一緒にきたのだけど・・・私の侍女がああ男が今晚誰かに私を襲わせて既成事実を作ろうとしているという話を聞いたらしくて、こっそりと逃がしてくれたの。だけど、追っ手がかかって逃げ回っているうちに知らない所まで出てしまって・・・あなたの事をカリファが雇った追っ手だと思ったのよ、ごめんなさいね。」

「なるほど・・・それで」偶然とは言え、事情を知ってしまったら彼女を一人ほっとく訳にはいかない。俺は少し考えてから静かに言っ

た。

「それなら、俺たちの寮に来ないか？セルムも居る事だし、俺は友達の一部屋で休ませてもらうから。」

ロザリアは吃驚したようにギルロイを見つめ、そして言った。「見ず知らずのあなたに迷惑をかける事はできません。でもあなたのご好意は受け取っておきます。」

ギルロイは呆れたようにロザリアに向かって言った。「無理すんなよ。どうせ着の身着のままできて行く宛も無いんだろ？暫くの間俺が上手くごまかしておいてやるから、とりあえず来いよ。」そう言ってロザリアの手を引つ張り胸の中へ抱き込んだ。

突然の出来事にロザリアの心臓は激しく波打つ。いつもは知らない男性に触れられるとじんましんが出る程嫌な思いをするのだが、何故かギルロイの胸の中は安心できた。

「は、離して下さい！わかりました。あなたのお言葉に甘えます。それにセルムに会えるなら、あの子が今回の件に関して何とかしてくれるでしょうから・・・」

「じゃあ決まりだな！」そういつてギルロイはロザリアに向かって微笑みかけた。

人目を避けつつ、二人は連れ立って寮への道を急いだ。幸い追っつては二人に気がつかなかったのか、無事に寮まで辿り着いた。本来、男子寮は女子禁制である。

だが、ギルロイは初日に悪友の一人から手に入れた裏口の合鍵を使って密かにロザリアを自分達の部屋へと招き入れた。

「やあ、ギル、遅かったね！先ほどレイモンドが君の鞆を届けに・・・」戸を開けて入って来た俺と黒ずくめのフードをかぶった侵入者にセルムは言葉を濁した。

部屋へ入り、フードを取った彼女の姿をみて彼は啞然と呟いた。「姉さん・・・」

第11話

セルムは驚いたように暫く姉の顔を見つめていたがクスリと笑って言った。

「姉さん、いや姉上も必然的に星と出会ったと言う訳ですか・・・。」

「

「星？」なんの事だとギルロイはセルムに目を向ける。

「なんでもありません、それよりも姉上、どうしてここへ？」

「それは・・・シャロンに逃がしてもらったのよ。」

「シャロンに？それはまた穏やかではありませんね・・・。いったいどうしたというのです？」

ギルロイが椅子を差し出すとシャロンはゆっくりとその身に起った事を話し始めた。

「なるほど・・・カルファが・・・。そうですか。」

「だから私は信用ならないものを連れてくるのは嫌だったのよ。いくらお父様の命とはいえ・・・。」

「では姉上を売ろうとした相手はこの学院内にいるのかもしれないね・・・。」そういつてセルムは窓際に立つギルロイを見上げた。

「ああ、なんだか怪しい感じだったからな。俺をみてかなり焦っていたし。」

「そうですね・・・。どちらにしろ、姉上がいなくなった事についてあの者は必死になって探している事でしょう。私のところにも探りが入るかもしれませんが・・・。どうしましょうか・・・。」

「寮内までは普通、寮員以外は入れない事になっているし、ここは男子寮だからな。男嫌いでも有名？なお姫様がこんなところにいるとは誰も思わないだろうよ。」

「確かに・・・穴場ではありますね。しかし、よく連れてはいれま

したね？」

「まあ、裏口を使ったり、色々だ・・・。」そういつてギルロイはきまり悪そうに頭をかいた。

しかし、あまり詳しい事情は話してはくれなかったが、よくこの姉が一度ホテルで顔を合わせただけのギルに大人しくついてきたものだ。普段の姉からはとても想像できない。男に関してはこれでもかと、嫌な思いもたくさんしているらしく、じんましんが出る程嫌っていると言っている。

やはり、これもばば様の言っていた星の導きなのか・・・。

「どちらにしろ、私はどこぞの国に売られる運命です。その時がくれば覚悟もしておりますが、汚い手を使って手込めにされるぐらいなら死んだ方がましです！」

気の強い女だな・・・。最初に見た時はもっと儂く散って行きそうな風情だったのに、今日一日で随分とこの女に対する意識が変わってきた。まあ、さすがに俺も女に刃物を向けられたのは初めてだったしな。くつと薄く笑う。大きく開かれた美しい紫紺、セルムのそれよりも深いアメジストの瞳には強い意志が宿っている。その瞳を見つめていると無意識に抱き寄せてしまいたくなる。馬鹿だな、俺も・・・。

「まあ、待つて下さい、姉上。とりあえず、ずっとこうして隠れている訳にもいきませんし、カルファの裏をかく方法を考えましょう。」そういつてセルムはにやつと笑う。

面白そうにギルロイが尋ねる。

「何か策はあるのか？」

「そうですね、ギル、あなたにも是非手伝ってもらいたいと思つてますよ・・・。あと、そうですね、できれば信用できるものが一人、

二人いると助かりますが・・・」そういつてセルムは扉の方へ注意を促す。

俺はその視線を受け、扉の前まで静かに歩み寄るとガチャツと扉を開けた。途端バランスを崩してた折れ込んで来た者が二人・・・。

「レイモンド・・・お前ら・・・」呆れたようにギルロイがレイモンドとその従者カルキンを見る。レイモンドはとまかくカルキンまで一緒とは。

ぱんぱんつと埃をはたいて立ち上がったカルキンは少し顔を赤くしてきまり悪そうにこちらに目を向けた。

「すみません・・・。とんだ所をお見せしてしまいました。騎士の名折れです。」

「ギルロイが帰ってるかと思って遊びにきたら、声が聞こえてくるからつい気になっちゃって・・・。」とレイモンドが言い訳する。

「かまわないですよ。お二人ともどうぞお入りになって下さい。さすがにこの人数では多少手狭ですが、寝台の上にもおすわりになって下さい。」セルムがにこやかに促す。

ロザリアは新た入ってきた二人を不審者を見る様な目つきで見ている。

「セルム、あんまりこいつらを甘やかすなよ。」そういつてギルロイが肩をすくめ、扉を閉める。

むっとしてレイモンドが声を上げた。「ギルロイに言われたくないよ！一番人に面倒かけまくってるのにさ。」

「あ？」幼馴染みで仲は良いが、その分度々喧嘩もする二人の険悪ムードを断ち切ったのはロザリアの一言だった。

「セルム、この方達は・・・？」鈴を転がした様な美しい声音に皆の視線がロザリアに集まる。

レイモンドはしばらく惚けて魂を盗られたかのように目の前に座る美

しい女性を凝視している。

「ご心配なさらなくても大丈夫ですよ、姉上。この方達はギルの親友とその従者の騎士である、カルキンさんです。この方達なら私たちの秘密の話も誰にも言ったりする事はありません、それどころかきっと私たちの力になってくれる事でしょう。」そういつてセルムは二人の方をみてにつこりと笑う。当の二人は首がおかしくなるのではないかと思う程度も首を縦に振っている。まったく、男って奴は・・・ギルロイは自分を柵に上げて何故か苦々しい思いで幼馴染みとその従者を見やった。

第12話

「お前が手紙を寄越した男か・・・？こんな所に呼びつけて何のつもりだ？」胡散臭そうに睨みつけながら目の前の男が言った。どうやら建前上は一人で来たようだ。だがまあ、どうせ奴の事だ、影で幾人が用意しているに違いない。それはこちらも同じだが・・・。ギルロイはクスリと笑って口を開く。

「つれないな、あの手紙を見て来たって事はお前もよほど焦っているんだろう・・・？」

「貴様・・・！俺を誰だか分かって言っているのか？！貴様こそなんだ、そのふざけた仮面は！」

「ああ、これか？なかなかの力作だろう？結構大変だったんだ。まあ、それはおいておいて、本題に入るうか？」

「本題？」

「ああ、本題だ。その為に来たのだろう・・・？俺はお前の知りたい情報を持っている。」

あれから密かに俺たちは奴の事を徹底的に調べ上げた。ジェフリー・ゴードン・モルディウス。名前だけは立派だがさる王家の血縁に当る大貴族のドラ息子だ。あいにくその家にはこいつの他、妹が一人、つまり奴が次代の家督を継ぐ訳だが・・・はつきり言ってこんな奴が跡継ぎとは同情する。

無類の女好きで、片っ端から色んな女に手を出してはその後始末を金か暴力で片付けている。親父はなかなか商才があり、莫大な財を溜め込んでいるが片っ端からあいつが使っている所を見ると先はなさそうだ。実家では息子の醜聞にしびれを切らした父親が奴に婚約者をあてがい、学院を卒業したらすぐに結婚式を行う様に手はずを整えているらしい。

だが、奴、ジェフリーには本命がいた。それが、セルムの姉であるロザリア王女だ。どこで見かけたのかは知らないが、随分長い間、本国の方にも求婚の書を送っていたという。当のロザリア王女は知らないと言っていたが……。幾度書を送っても一向に返事がなくしびれを切らしていた奴の元に朗報が入った。王女が国をでて、有り体に言えば、身売りをするというのだ。

最初は彼女を競り落として物にする事も考えていたみたいだが、本国での式の準備は着々と進められている上、今までのように湯水のごとく金を使う事が出来ない様にされている。となると、彼女を正攻法で競り落とすのは難しいと考えた奴は、従者に話を持ちかけた。

従者ごときが一生手にできないぐらいの金と引き換えに（といっても、ロザリア王女の競りでは比較にならないぐらいの高値が予想されている）手引きさせ、既成事実を作ってしまったのだ。だが、事前にその情報もれ、王女に逃げられてしまった。傍目にも分かる程奴らは必死になって王女を探しまわっている。競りの日も差し迫って来ているのに、当の王女が居ないとなれば、従者の首もあつたものではない。やつらは相当焦っていた。そこで、俺たちは奴らの前に餌を蒔いたのだ。

「あの手紙の内容は本当なんだろうな・・・？」奴が目をぎらつかせて凄んだ。

「ああ、お前が探しているお姫様の居所だろうか？知ってるぜ・・・」

「・・・」

「それよりも、約束の者は？」

奴は小さく舌打ちすると手を大きく振り上げた。敷地の影から一人の男が小さな女の子を抱いて出て来た。奴らはロザリア王女のお付きの侍女のシャロンという女の子供を人質にとり、口を割らせようとしたが、シャロン自身ロザリア王女の行方を知っている訳ではない。彼女は王女を逃がしたただけなのだ。だがそれを知ったロザリア

王女はすぐに自分を餌に子供の救出を願ったのだ。自分の身よりも侍女を気遣うその姿勢には好感が持てた。

子供は眠っているようだった。部下らしき男が俺に子供を手渡す。眠っている子供は思ったよりも重かった。

「では、約束通り教えてもらおうか、彼女の居場所を？」

俺は予め決めておいた宿の名を口にする。奴は一瞬不思議そうな顔をしたが、念を押しつつ立ち去った。案の定、思った通り奴が去った後に、奴の部下らしい幾人かの男たちが待ち伏せをしていた。本当に芸のない男だ。

子供を抱いたまま走り出した俺の後を男たちが剣を抜いて追いかけてくる。が、すぐにカルキンが反対に奴らを切り伏せてしまった。

「口程にもありませんね。」軽々と男たちをあしらってカルキンがつぶやいた。

「ああ、それにしても、レイモンド達の方はうまくやっているだろうか？」

「大丈夫でしょう。確かに我が君だけなら、私も少し不安がありませんが、セルム殿下はとも頭の切れる方みたいですし……。」

「そうだな……」そう言っただけで俺達はくすくと笑いあい、その場を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4270h/>

囚われの王子と・・・番外編：愛する君の為に

2010年10月14日21時34分発行